

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究  
実施方法等

## 1. 実践校について

実践校名	いばらきだいがくきょういくがくぶふぞくちゅうがっこう 茨城大学教育学部附属中学校	
学科名	生徒数	学級数
	445 (名)	12

## 2. 実践研究の対象

全校生徒(445名)において実施

## 3. 実践研究の実施経過

- 4月16日(火) 5校時 グローバル市民科ガイダンス
- 4月19日(金) 5校時 全校総合「しあわせ社会の実現～創ること～」ガイダンス
- 4月22日(月) 4校時 「しあわせ社会」の定義付けに関する話し合い①
- ※大型連休中 フィールドワーク(調査)
- 5月8日(水) 5校時 「しあわせ社会」の定義付けに関する話し合い②
- 5月10日(金) 5校時 「しあわせ社会」の定義付けに関する話し合い③
- 5月21日(火) 4校時 「しあわせ社会」の定義に対する話し合い
- 6月13日(木) 5校時 「働きかけ」に向けた話し合い①
- 6月28日(金) 5校時 「働きかけ」に向けた話し合い②
- 7月3日(水) 5・6校時 「働きかけ」に向けた話し合い③, 企画書の立案①
- 7月9日(火) 6校時 「働きかけ」に向けた話し合い④, 企画書の立案②
- ※夏季休業中 フィールドワーク(調査, 「働きかけ」準備)
- 9月10日(火) 6校時 フィールドワーク(「働きかけ」)の実施  
～ ※課外活動の時間に「働きかけ」を実施した班もあり
- 9月24日(火) 6校時
- 10月28日(月) 5校時 フィールドワーク(「働きかけ」)の振り返りと検証①
- 11月24日(水) 4校時 フィールドワーク(「働きかけ」)の振り返りと検証②
- 12月2日(月) 5校時 振り返り

※ 毎週水曜日に、スクールボランティアコーディネーター(以下「SVC」と表記)が来校し、グローバル市民科以外のスクールボランティア(以下「SV」と表記)も踏まえながら打合せを実施した。

#### 4. 実践研究の実施体制

本校では、研究主題「社会を創る自立した生徒の育成」のもと、〈めざす生徒の姿〉を設定し、総合的な学習の時間はもちろん、各教科等において様々な手立てを考え、実践を進めてきた。本校では、「社会」を「人と人が構築する空間の総称」、「地域」を「生徒の身の回りのコミュニティ」と捉えてきた。

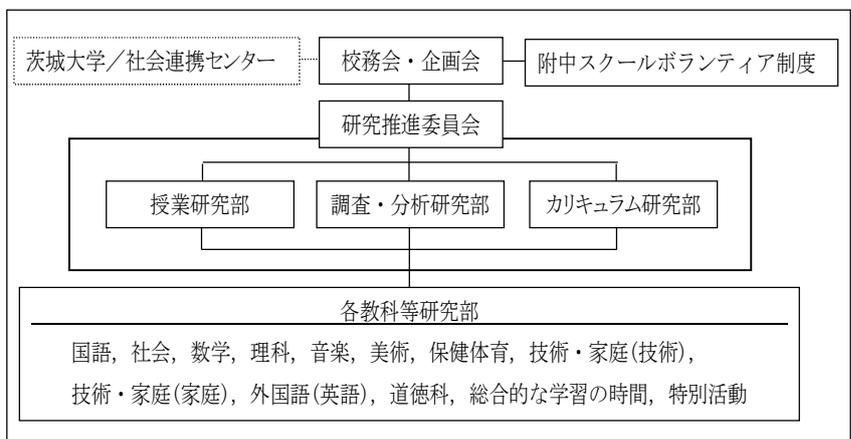
〈めざす生徒の姿〉

- 問いを見いだし、解決に向けて粘り強く考えたり、学んだことを活用したりし、内省(自己探究・自己更新)する生徒
- 社会と自分との関係を考え、主体的な態度で社会の形成に参画・貢献しようとする生徒

例えば、人が複数集まれば、その空間をよりよくするための「社会」が創られ、生徒が遠く離れた県外を訪れば、その空間も生徒にとっては大切な「地域」であるという考え方である。

令和元年度は、研究推進委員会や総合的な学習の時間研究部を中心に、組織的な運営を図ってきた。実社会との接点を生み出すために本校の附中スクールボランティア制度を活用したり大学との連携を積極的に図ったりし、様々な方々に生徒の学びをサポートしていただいた。生徒の考えを聞いていただいたり、その考えに対して実社会で生活されている立場や専門的な立場、あるいは少し距離を置いた客観的な立場などから意見をいただいたりする機会を意図的に設定し、多様な方々や機関と連携を図りながら本プログラムを進めた。

本校は、平成10年に「附中スクールボランティア制度」を発足し、地域人材を積極的に活用しながら生徒の学びを支えるシステム構築に当たってきた。この制度の大きな特色は、週に一度、SVC(在校生保護者2名、卒業生保護者2名)が来校し、教員と地域人材をつなぐ橋渡しを行ってくださっていることである。今年度の取組において特に重視したことは、学校と地域や実社会とを円滑につなぐため、「附中スクールボランティア制度」を活用し、実社会で生活されている方々を積極的に学校に招いたこと(授業支援ボランティア)である。生徒が学校の外に出てフィールドワークを行うことは重要であるが、労力の割に効率が良くないことがある。逆に社会を学校に取り込み(多様な方々にご来校いただき)、学校の教育目標を社会と共有しながら生徒の学びを実現していけるように工夫していった。学校内外の人的資源を有効に活用しながら、他者に対して自分の考えを根拠とともに明確に説明したり、対話や議論を通じて相手の考えを理解したり自分の考え方を深めたりしていく中で、社会を創る資質・能力を育ていけるようにした。



## 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

実践校名：茨城大学教育学部附属中学校

### 概要

全校生徒，全教員で取り組む総合的な学習の時間（グローバル市民科）「しあわせ社会の実現～働きかけること～」における課題解決型の活動を通じて，持続可能な社会を創る資質・能力を育む学習プログラムの開発にあたった。

### 学習プログラムの目標

- グローバルな視点で身近な地域で起きている問題に関心をもち，その解決に向けて身に付けたことを活用しながら主体的に判断したり，今後も責任をもって関わったりしていこうとする力を育む。
- 周りの人や社会，自然などとの関係を考え，「関わり」や「つながり」が大切であることを理解し，より良い社会創りを尊重していこうとする力を育む。

### 学習プログラムの主な内容

- ① グローバル市民科ガイダンス（4月16日（火）5校時）  
全校生徒でグローバル市民科のねらいを確認したり，昨年度の学びの成果を発表したりする。
- ② 全校総合「しあわせ社会の実現～創ること～」ガイダンス（4月19日（金）5校時）  
全校生徒で全校総合のねらいを確認したり，年間の見通しをもったりする。
- ③ 「しあわせ社会」の定義付けに関する話合い①（4月22日（月）4校時）  
「しあわせ社会」とはどのような社会か，グループで議論する。  
「しあわせ社会」について，課外活動として地域の人にインタビューする。
- ※ 大型連休中……フィールドワーク（調査）
- ④ 「しあわせ社会」の定義付けに関する話合い②（5月8日（水）5校時）  
「しあわせ社会」とはどのような社会か，グループで議論する。
- ⑤ 「しあわせ社会」の定義付けに関する話合い③（5月10日（金）5校時）  
グループにおける「しあわせ社会」を定義付けする。
- ⑥ 「しあわせ社会」の定義に対する話合い（5月21日（火）4校時）  
グループにおける「しあわせ社会」を吟味する。
- ⑦ 「働きかけ」に向けた話合い①（6月13日（木）5校時）  
グループごとに取り組む課題を設定し，「働きかけ」の計画を立てる。
- ⑧ 「働きかけ」に向けた話合い②（6月28日（金）5校時）  
グループごとに取り組む課題を設定し，「働きかけ」の計画を立てる。
- ⑨ 「働きかけ」に向けた話合い③，企画書の立案①（7月3日（水）5・6校時）  
「しあわせ社会」の実現に向けて働きかけを行う計画の妥当性について話し合う。

- グループごとに「働きかけ」を決定し、企画書を作成する。
- ⑩ 「働きかけ」に向けた話し合い④，企画書の立案②(7月9日(火) 6校時)  
グループごとに「働きかけ」を決定し、企画書を完成する。
- ※ 夏季休業中……フィールドワーク(調査，「働きかけ」準備)
- ⑪ フィールドワーク(「働きかけ」)の実施(9月10日(火) 6校時～24日(火) 6校時)  
「しあわせ社会」の実現に向けて，班ごとに地域で働きかけを行う。
- ※ 課外活動の時間に「働きかけ」を実施した班もあり
- ⑫ フィールドワーク(「働きかけ」)の振り返りと検証①(10月28日(月) 5校時)  
働きかけたことについて成果や課題を検証し，報告書を作成する。
- ⑬ フィールドワーク(「働きかけ」)の振り返りと検証②(11月27日(水) 4校時)  
働きかけたことについて成果や課題を検証し，報告書を完成する。
- ⑭ 振り返り(12月2日(月) 5校時)  
報告書をもとに発表し，自分の学びの成果と課題について振り返る。

### 学習プログラムの成果の概要

- 実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムの研究に向けて，附中SV制度や大学の協力を得ながら，学校内外の人的資源を有効に活用し，具現化を図るために生徒の学習支援を行っていただきながら，生徒の持続可能な社会を創る資質・能力を培うことができた。
- 学校と社会が一つの目標を共有し，SVの方々に繰り返し学校に足を運んでいただきながら，継続的に学習プログラムに参加していただき，生徒の学びを支えてもらったり成長を見守っていただいたりする実践を行うことができた。これらにより，生徒は社会や人と自分との「関わり」や「つながり」を感じながら，今後の身近な地域や世界の姿と自分の生き方や在り方を関連付けて振り返ることができた。
- 平成30年度は，実社会への働きかけが弱かったという課題が残った。令和元(平成31)年度は，「働きかける対象を明確にするとともに，検証する」ことを改めて確認し，教員も生徒も意識しながら学びと向き合うことができた。  
しかし，それでも働きかける対象がまとまらなかつたり(妥協できなかつたり)，十分な働きかけに至らなかつたりした縦割り交流班(異学年で構成する学び合いのグループ)もあった。そのような状況の生徒においても，実社会や他者との関係性を大切にしながら，今後の自分の生き方や在り方について考えていたり，講座が終了しても働きかけたりしていこうとする意志があることが振り返りで明らかになった。
- 生徒がリーダーとして話し合いを進行し，意志決定までもっていける力を身に付けたことで，学びの自立につながるとともに，教師のファシリテーターという役割に対する重要性の認識につながった。また，毎時間のねらいや核となる考え方は教員間で共通理解を図り，到達に向けたアプローチの仕方は，担当教員(縦割り交流班)に一存した。思考ツールの活用，話し合いの進め方，成果物の作成などにおいて各専門教科の特性が発揮されており，教員同士で学び合う研修の場にもなった。